



Title	フランス語前置詞àの用法と機能 : V à N とN1 à N2 の場合
Author(s)	梶原, 久梨子
Citation	大阪大学言語文化学. 2024, 33, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97278
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語前置詞 *à* の用法と機能—V *à* N と N1 *à* N2 の場合—*

梶原 久梨子**

キーワード：フランス語 前置詞 イメージスキーマ

Cet article a pour le but de présenter un schéma commun pour différents emplois de la préposition abstraite *à* en français. La préposition française *à* est la deuxième préposition la plus utilisée en français, et avec *de* qui est la plus utilisée, elles sont parfois traitées comme une préposition « incolore » ou « vide ».

Nous commencerons par faire une hypothèse fondée sur deux directions dans l'espace de la préposition *à* : (i) la direction et le point final comme dans l'exemple (1) et (ii) l'identification du point d'existence comme dans l'exemple (2).

(1) Je vais *à* Paris.(2) J'habite *à* Paris.

En généralisant la relation entre X et Y, nous pouvons dégager deux modèles pour *à* :

I. *à* dynamique : X et Y sont éloignés et X se déplace vers Y (schéma I)II. *à* statique : X et Y se trouvent à la même position (schéma II)

Nous pouvons désigner deux schémas fondés sur I. et II., en vérifiant son efficacité dans le cas de l'introduction d'un nom après un verbe (V *à* N) et dans le cas d'un nom composé (N1 *à* N2).

Concrètement :

- Dans le cas des verbes intransitifs, lorsque le sujet, la conscience, le comportement, etc. du sujet se déplace vers N, on peut l'appliquer au schéma I.

ex : Elle téléphone *à* ses amis.

Quelque chose qui exprime une similitude ou une affiliation peut être apparenté au schéma II.

ex : Laura ressemble beaucoup *à* sa mère.

Cette bague appartient *à* ma mère.

- Dans le cas des verbes transitifs :

* L'emplois et la fonctionne de la préposition française *à* – V *à* N et N1 *à* N2 (KAJIWARA Kuriko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

a) les verbes qui déplacent le complément d'objet direct (X) vers Y introduit par à correspondent au schéma I.

ex : J'offre un cadeau à ma mère

b) Le type exprimant l'appartenance indique la direction de à dans la mesure où l'action réalisée par le sujet est tournée vers Y, et peut être exprimée par le schéma I.

ex. J'emprunte un livre à Jean.

- Ces deux schémas peuvent également être appliqués aux noms composés.

a) L'usage (ex : un couteau à beurre) correspond au schéma 1 car X est pour Y.

b) Les caractéristiques et plats (ex. un homme à moustache, une soupe à l'oignon) correspondent au schéma II.

1 はじめに

フランス語前置詞 à はフランス語の前置詞の中で使用率二位であり、一位の de とともに「無色の」「空の」前置詞として扱われることもある。「無色の」「空の」という言葉が示す通り、à や de には意味はなく、あくまで統語規則上必要な場合に入れるものであるという見方もある。à は非常に抽象度の高い前置詞であり、その用法は多岐に亘る。また先行研究においても、他の前置詞に比べると à の意味機能を論じた研究は少なく、あらゆる用法に共通する à の機能は何かということの解明、à の本質は何かを解き明かすことには至っていないといえる。

そこで本稿では、まず先行研究を概観し（2 節）、à の本質はその空間義から導き出した静的な点と動的な点であると仮定し、à の空間義をもとに二つのイメージスキーマを描く（3 節）。動詞に後続する名詞を導入する場合（以下 V à N とする）の à と、複合名詞の場合（以下 N1 à N2 とする）の à においてその仮説の有効性を検証する。V à N と、N1 à N2 においてこれらのスキーマが有効であることを示し（4, 5 節）、静的と動的な点を「点」でまとめることによって à の用法に統一性を見出すことを提案する（6 節）。分析データは、辞書のデータに基づく。本稿は、多様な à の用法が空間義を元にしたイメージスキーマによって表すことができることを示すことを目的とするため、辞書の中で V à N と N1 à N2 という形式をとるもののうち、意味的な偏りがみられないようデータを抽出している。

2 先行研究と本稿の立場

2.1 フランス語の前置詞研究

フランス語の前置詞研究で代表的なものとしては、Vandeloise (1986), Cadiot (1997) などが挙げられる。Vandeloise (1986) では様々なフランス語の前置詞の使用について論じているが、à の章は設けられていない。Vandeloise (1991) では à についての章が設けられ、他の前置詞と対比しながら、à の使用に関してはトラジェクターとランドマーカのサイズ・大きさ・位置という3つの決定要素があると指摘し、両者がどのような関係であれば à の使用が認められるかということ进行考察した。実例とともに詳細な分析がなされており、主張の正当性を裏付けるものである。しかしスキーマは描かれておらず個別的な説明にとどまっており、話者が à の使用に関してどのような共通スキーマを持っているのかということに関してはあまり触れられていない。様々な用法に共通する概念やイメージは何かということや、à の統一性に関しての分析は検討する余地が残されているといえる。管見の限り、à の共通スキーマに関して十分に論じた研究は見当たらない。

Cadiot (1997) においては、à と de の多様な例があげられ、両者の使用条件や意味効果が分析されている。Cadiot (1997) は直感的には納得ができるものではあるが、母語話者の言語感覚に頼る部分が大きく、分析的な説明が十分であるとは言い難い。

à が「～へ」という意味であることから、代表的な意味は *prospéctivité* (前望性) であるとする見方もある。*café au lait* (カフェオレ) *homme à moustache* (口ひげを生やした男) など、*prospéctivité* では説明することが難しい用法もある。

2.2 本稿の立場

多義を分析する上では、Lakoff (1987) が行なったような放射状カテゴリーを描くことで語の意味間の広がり进行記述するという立場もある。しかし同じ語を用いるからには、すべての事例に通じる共通性を認めることができるはずであり、本稿はこの立場をとらない。また Taylor (2012) の *Mental Corpus* や平沢 (2019) による使用基盤モデルに基づく具体的な事例に着目する分析もあり、言語習得の面ではこれらの研究立場は優れているといえる。しかしこれらに関してもやはり、話者がどのように世界を認識しているかということを考える上では、異なる事象を表す個別の表現の背後にある共通スキーマを取り出す必要があると考える。本稿は、Lakoff (1987) のイメージスキーマに依拠し、フランス語の前置詞 à のスキーマを取り出すことを目的とする。

3 à の空間義とイメージスキーマ

3.1 à の空間義

小学館ロベール仏和大辞典には、à の空間義として二つの用法が挙げられる。①方向、終点と、②位置、存在点であり、それぞれ (1), (2) のような例が挙げられる。

(1) Je vais à Paris.

私 行く (一・単・現在)¹ ～に パリ

私はパリに行く。

(2) J'habite à Paris.

私 住む (一・単・現在) ～に パリ

私はパリに住んでいる。

この二つの空間義が à の多種多様な用法の出発点になっていると仮定する。これら 2 つの用法の差異としては、動作の主語などである X と、前置詞に後続する名詞である Y の位置関係が異なることが挙げられる。(1) では je (私) と Paris の位置は離れているのに対し、(2) では je (私) は Paris に存在する。一般化すると、à には次の二つのパターンがあるといえる。

① X と Y が離れており、X が Y の方へ動く場合に用いられる動的な à

② X と Y が同位置とみなせる場合に用いられる静的な à

これらをもとに次節ではスキーマを設定し、à の多様な用法の多くがこれら 2 つのスキーマに還元できることを示す。

3.2 イメージスキーマ

à の空間義から抽出した二つのパターンをイメージスキーマ化すると、それぞれ次のように描くことができる。

四角はトラジェクターを、白い楕円はランドマークを表す。イメージスキーマ I の点線で描かれていることはその空間から移動をし、黒い点は接していることを表す。イメージスキーマ II ははじめてからトラジェクターとランドマークが接しており、トラジェクターがランドマークに位置していることを表している。

¹ 動詞の後の () 内は、人称と単数 / 複数および時制を表す。例えば (一・単・現在) であれば、一人称単数現在形を表す。



Figure1. イメージスキーマⅠ（動的な à）

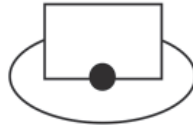


Figure2. イメージスキーマⅡ（静的な à）

このスキーマを、時間義に当てはめてみる。小学館ロベール仏和大辞典においては、時間義は①方向、終点、②行為、出来事との同時性、③時点、時期の3つの用法があるとされている。

①方向、終点

(3) Déplaçons le rendez-vous à la semaine prochaine

延期する（一・複・現）定冠詞 約束 ～に 定冠詞 週 次の
約束を来週に延期しよう。

②行為、出来事との同時性

(4) A son réveil, je partais.

～の時 所有形容詞 私 出かける（一・単・半過去）
彼が目を覚ました時、私は出かけるところだった。

③時点、時期

(5) Au² mois de décembre, il fait froid.

～に、には 月 ～の 12月 非人称主語 天候を表す動詞（三・単・現） 寒い
12月は寒い。

(3) では le rendez-vous（約束）は元々あったところから la semaine prochaine（来週）へと移っているため、①方向、終点はイメージスキーマⅠで表すことができる。(4), (5) はそれぞれ主節で示される事態が à N において生じることを表しており、②、③の同時性や時点時期はイメージスキーマⅡで表すことができる。時間義は空間義のメタファーであるとも言われていることから、転用することが想像しやすい。空間と時間はいずれ

² au は前置詞 à + 定冠詞男性名詞単数形 le の縮約形である。

も事態認知に関わる基本的な概念であり、同じような意味、方向性を担っていることが多い。時間義の方向、終点はまさに空間義①に対応し、時間義の②行為、出来事との同時性③時点、時期は、XとYが同じ範囲内にあることを表すことから、空間義の②の位置、存在点に対応しているといえる。

3節では、まず前置詞 à には、大きく分けて方向、終点と、位置、存在点という二つの空間義があることを確認した。この二つの空間義は、それぞれ動的な点と静的な点として一般化できることを示し、これらを元に à のイメージスキーマを描いた。そして空間義と密接に結びついている時間義において、二つのイメージスキーマが適用可能であることを確認した。次節では V à N と N1 à N2 に分析対象を広げ、共起する語の意味によってバリエーションはあるものの、基本的には3節で提案した二つのイメージスキーマによって説明可能であることを示す。

4 V à N

4節では、à によって導かれる N が主体と関わっているのか、あるいはもう一つの N と関わっているのかを区別して検討するために自動詞と他動詞に分け³、いくつかの動詞を例に取り上げて考察をしていく。なお、自動詞 (J'habite à Paris. 私はパリに住んでいる) のように、主語が移動する主体となる場合と、他動詞 (Jean donne un livre à Marie. Jean は Marie に本を贈る) のように目的語が移動する主体になる場合とがあるが、本稿では前者の場合は主語を X として、後者の場合は目的語を X として扱う。ただし、à N は必須項である場合に限る。それ以外のものは副詞的な要素になるため本稿の分析対象としない。

4.1 自動詞の場合

自動詞で à N が必要となるのは、ほとんどの場合で、2.1. で見た①方向、終点を表す動詞 (aller, partir など) や、②位置、存在点 (habiter, être など) である。

(6) Je vais à Paris.

私 行く (一・単・現) ～に パリ

私はパリに行く

³ フランス語では、à N の N が位置や存在などで全体として副詞句を構成するのではなく、動作の対象である目的語と見なされる場合、間接他動詞と伝統的に分類されている。本稿では間接他動詞は自動詞とみなす。

(7) Je pars à Londres demain.

私 行く (一・単・現) ～に ロンドン 明日

私は明日ロンドンへ発つ

(8) J'habite à Paris.

私 住む (一・単・現) ～に パリ

私はパリに住んでいる

(9) Ce livre est à Paul.

指示形容詞 本 ～である (三・単・現) ～の ポール

この本はポールのものだ

(6), (7) はいずれも主語の移動を表す動詞であり、à は主語が向かう先を導き、イメージスキーマ I で表される。(8), (9) は主語が à によって導入される N に位置することを表し、イメージスキーマ II で表される。動詞の意味によってイメージスキーマ I, II に分かれる。

(10) から (12) のような例は現実空間における主体の移動を伴わない、空間義のメタファーである。これらはイメージスキーマ I を元にしたスキーマによって説明することができる。ここでは移動がないため、イメージスキーマ I で点線だった部分が実線で表されるが、基本的には同じ図式で描くことが可能である。

(10) Elle téléphone à ses amis.

彼女 電話する (三・単・現) ～に 所有形容詞 友達

彼女は友人に電話をする。

(11) Jacques tient énormément à sa voiture.

ジャック つかむ (三・単・現) 膨大な ～に 所有形容詞 車

ジャックは彼の車に強い愛着を持っている。

(12) Prenez garde aux⁴ voitures !

感情などを持つ 注意 ～に 車

車に注意なさい。

⁴ aux は à + 定冠詞複数形の縮約である。



Figure3. 移動を伴わないイメージスキーマⅠ（動的な à）

(10), (11), (12) の主体は移動をしていない。Jacques の関心や聞き手の意識が車へ移り元の場所から無くなっているわけではなく、比喩的に X が Y の方に向くことを表す。電話も空間的な隔たりがあり電波を通じてにはなるが、Y の方へ向かって声が発せられている。したがって (1) = (6), (7) などとは異なり、方向を示すという色が強い。

一方で次のような例はイメージスキーマⅡで表すことができると考えられる。

(13) Cette bague appartient à ma mère.

指示形容詞 指輪 属する（三・単・現） に 所有形容詞 母
この指輪は母のものだ。

(14) Laura ressemble beaucoup à sa mère.

ローラ 似ている（三・単・現） とても ～に 所有形容詞 母
ローラは母親によく似ている。

(13) では、cette bague（この指輪）は ma mère（母）の所有物であることから、X が Y に位置付けられているといえ、イメージスキーマⅡで表すことができる。(14) では Laura の特徴が sa mère（母親）の特徴と一致している部分が多いということを表しており、X と Y はそれぞれの一部が重なっていると捉えることができる。Figure4. で X と Y の外枠が太線であることは、X と Y の属性という切り離し難いものが部分的に重なっており、両者が強固な結びつきであることを表している。



Figure4. X と Y の結びつきを表すイメージスキーマⅡ（静的な à）

しかし、次のような手段を表すものは一見すると点で表すのが難しいように思われる⁵。

(15) Laura joue à la poupée.

ローラ 遊ぶ (三・単・現) ～で 冠詞 人形

ローラは人形で遊ぶ。

jouer はフランス語で「遊ぶ」を意味する。jouer au tennis (テニスをする)、jouer aux cartes (トランプで遊ぶ)、jouer à la poupée (人形で遊ぶ) などのように、スポーツやゲーム、遊びをすることを表す際に jouer à N が用いられる。jouer à la poupée や jouer aux cartes は人形を使って遊ぶ、トランプを使って遊ぶという手段を表すと捉えられるが、このような例を説明するために、手段と活動の中間的な例であると捉えられる jouer au tennis (テニスをする)⁶ について考える。

テニスは人形やトランプよりも、主体の活動が含意される度合いが高いと考えられる。「人形」や「トランプ」という名詞を聞いて想像するのはその名詞のものであるのに対し、「テニス」と聞くと人がテニスをしている様子を思い浮かべることが多いためである。テニスをすることを表すためにテニスラケットやテニスボールといった使用する道具の名前ではなく、テニスという競技名を用いることから、テニスという名詞が活動を含むものであるといえる。

テニスは主体の活動を表すことから、jouer au tennis は主体がテニスという活動の中にいるという意味で、イメージスキーマ II を用いて説明することができる。人形やトランプは「～で」という手段であると捉えられるが、テニスと同様にメトニミーであり、実際には活動を表していると考えることができる。したがってテニスと同じようにイメージスキーマ II で表すことができる。つまり N は字義的には遊びの種類や道具を表すものであるが、メトニミーになっていてそれをする行為を表す。

4.2 他動詞の場合

他動詞の場合、前置詞 à の「～へ」という次の (16), (17) のように、X が Y へと移動するものが多い。

⁵ 説明することが難しい用法として、離脱 II a seul échappé à l'accident. (彼 1 人だけが事故から無事に助かった) も挙げられる。ロベール仏和大辞典によると、échapper は古くは de が用いられたという。確かに、逃げるという意味の échapper は、対象の出自を表す de の方が親和性はあるように思われる。何らかの原因で de から à への転用があったと考えられるが、その原因は今後の課題としたい。

⁶ 同じような意味を表すものとして、faire du tennis という言い方がある。faire は日本語では「する」にあたる動詞で、faire N で様々な活動を表すことができる。

(16) J'offre un cadeau à ma mère.

私 贈る (一・単・現) 不定冠詞 ~に 所有形容詞 母

私は母にプレゼントをあげる

(17) Il paye sa chambre à l'hôtel.

彼 払う (三・単・現) 所有形容詞 部屋 ~に 定冠詞 ホテル

彼はホテルの部屋代を払う

cadeau (プレゼント) が私から ma mère (母親) に、sa chambre (部屋代) が彼から l'hôtel (ホテル) に移動することを表すことから à は動動的であり、イメージスキーマ I に対応しているといえる。

しかし次のような例の à は離脱や分離を表すとされ、一見すると à の「方向」や「存在点」の意味に反し、いずれのイメージスキーマにも該当しないように思われる。

(18) J'emprunte un livre à Jean.

私 借りる (一・単・現) 不定冠詞 本 ~に ジャン

ジャンから本を借りる⁷。

(19) J'achète des roses à une fleuriste.

私 買う (一・単・現) 不定冠詞 薔薇 ~から 不定冠詞 花屋

花屋から薔薇を買う。

à が離脱や分離を表す他動詞は、ロベール仏和大辞典によると emprunter (借りる), prendre (とる), acheter (買う), puiser (水などを汲む), arracher (奪い取る), dérober (盗む), enlever (盗む), ôter (奪う), retirer (取り上げる), soustraire (騙し取る) である。これらの動詞に共通する点として、相手のものを自分のものにすることが挙げられ、さらに、多くの動詞で強い力や強制力を伴っている。すなわち、主体の働きかけが相手に対して強いと言い換えることができる。したがって、J'emprunte un livre (本を借りる)、J'achète des roses (薔薇の花を買う) という行為がそれぞれ Jean と花屋の方へ向かっていると考えることができ、イメージスキーマ I に対応している。

このことを確認するため、(18), (19) を、他の前置詞に置き換えて意味の違いを見る。

⁷ 日本語でも「ジャンに本を借りる」ということができる。

(20) J'emprunte le livre *de* Jean.

ジャンの本を借りる。

(21) J'achète les roses *d'*une fleuriste.

花屋の薔薇を買う。

(22) J'achète des roses *chez* le fleuriste.

花屋で薔薇を買う。

à を、所属を表す前置詞 *de* にした場合、J'emprunte un livre *de* Jean. (Jean の本を借りる)、J'achète des roses *d'*une fleuriste. (花売りの花を買う) という意味になり、Y が所有しているものを借りる・買うことになる。(20), (21) はそれぞれ un livre *de* Jean (Jean の本)、des roses *d'*une fleuriste (花屋の花) を切り離すことができず、ここでの X は livre, roses で、Y は Jean, fleuriste である。また、家を表す前置詞 *chez*⁸ に置き換えると、花を買うという事態が展開する場を導入する。X が J'achète des roses で、Y が fleuriste であるという点は à の場合と同じであるが、発話するコンテキストから両者の違いを指摘することができる。*chez* を用いた (22) は、例えば毎日の習慣について話している場面や、過去形にして今日何をしたかを話している場面、あるいは未来形にしてこの後何をするかを話している場面で用いられる。いわば「花を買う」に焦点がある。一方、インフォーマントによると、à を用いた (19) が発話される状況は、「私が花を買うのはインターネットやスーパーではなく花屋なのだ」というような場面であるという。すなわち「花を買う」という行為の先が花屋であることを表している。

5. N1 à N2

N1 à N2 として、大別すると①目的、用途、②適合、③特徴、付属、機能、④料理で調味料や添えられているものを表すという四つの用法がある。①、②は動的であり、③、④は静的であるということを以下で見ていく。

①目的、用途

(23) un couteau à beurre (バターナイフ), une brosse à dents (歯ブラシ), une cuillère à café (コーヒースプーン)

⁸ *chez* は「～の家で」を意味し、Jean a pris déjeuner *chez* Laura. (Jean は Laura の家で昼食を食べた) のように使われる。「～で買い物をする」というとき、スーパーマーケット (supermarché) や百貨店 (grand magasin) など、大きい商業施設には内部を表す前置詞 *dans* が用いられるが、パン屋 (boulangerie) 花屋 (fleuriste) 肉屋 (boucherie) など特定の店を表す単語には *chez* が用いられる。

un couteau (ナイフ) とバターは別々の存在であり、「バターのために用いられるナイフ」であることから、ナイフがバターの方へ向かっている。une vase à fleurs (花瓶) などは、現実に行う操作としては花が花瓶の方へ向かってくるが、概念としては同様に、花のために用いられる花瓶であり、X (N1) が Y (N2) の方へ向かっているといえる。

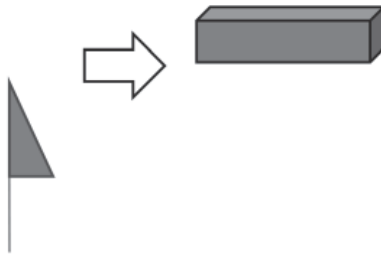


Figure5. couteau à beurre 概念図

②適合

(24) un livre à mon goût (私の好みに合った本)

適合 (...のとおり、にに合わせて、従って、応じた) も同じく、un livre à mon goût (私の好みに合った本) は、livre (本) が mon goût (私の好み) に合っているのだから、mon goût (私の好み) に livre (本) が向かっており、同じ構造で表すことができる。

③《名詞の補語を導き、特徴、付属、機能を示す》

à (+ 形容詞) + 無冠詞名詞

(25) un homme à moustache (口髭を生やした男), une moquette à fleurs (花模様のカーペット)

à + 定冠詞 + 名詞

(26) garçon aux yeux bleus (青い目の少年) femme au chapeau noir (黒い帽子の婦人)

対して homme à moustache (口ひげを生やした男) や soupe à l'oignon (オニオンスープ) など、③と④に関しては、Y は X の一部であり、全体と部分の関係という構造でまとめることができる。homme à moustache (口ひげを生やした男)、garçon aux yeux bleus (青い目の少年) などは、口ひげは男の一部であるし、目も少年の一部である。X

(homme, garçon) と Y (moustache, yeux bleus) の地点は一致しており、静的な点であるといえる。

④ 【料理】 調味料または具として入れたり、添えたりする材料を表す

(27) une soupe à l'oignon (オニオンスープ), une glace à la vanille (バニラアイスクリーム), un canard aux petits pois (鴨のグリーンピース添え)

料理についても同様に、soupe à l'oignon (オニオンスープ), glace à la vanille (バニラアイスクリーム) では N1 (X) は N2 (Y) の内容物であることから、両者は静的な関係であるといえる。canard aux petits pois (鴨のグリーンピース添え) など、添えてあるものについては、canard (鴨) が全体で petits pois (豆) が部分であるという説明は一見すると成り立ちにくいように思われるかもしれない。しかしここでの canard (鴨) は、単に鴨という肉の塊を表しているのではなく、鴨はメトニミー⁹で、鴨を使った料理を表しているといえる。したがって petits pois (豆) はその料理の構成物であり、ここでも部分と全体の関係が成り立つといえる。以下の図は四角が鴨と豆を含めた料理を、大きい丸が鴨を、小さい丸が豆を表す。

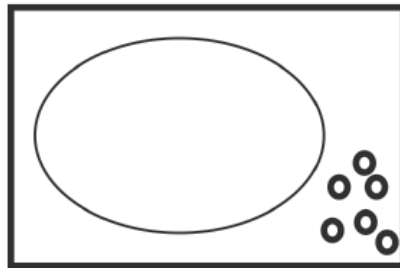


Figure6. canard aux petits pois 概念図

N1 à N2 の、全体と部分の関係については、一部の動詞においても同様の機能が認められる。例えば、consister は「～を構成する」などを表す動詞であるが、動詞不定詞を導入する際、à を介し、「～することにある」ということを表す。

(28) Votre erreur *consiste à* croire que tout le monde approuve.

あなたの過ちは皆が自分に賛同していると思っていることだ。

⁹ このようなメトニミーの関係は、次の2つの例の対比からも確認することができる。robe à ruban は「リボン柄のワンピース」を表す。リボンがワンピースとは別の存在であるとみなされる「リボン付きのワンピース」は、robe avec ruban を用いる。avec は「～と」という随伴や、「～のついた」という付属などを表す前置詞である。

(29) Ce travail *consiste à* écrire des adresses sur des enveloppes.

この仕事（の内容）は封筒の宛名書きだ。

また②に関しては、à N が X の位置付けを行っているという点でも J'habite à Paris. との共通性を見出すことができる。J'habite à Paris. は、X あるいは X-habiter というまとまりを Y に位置付ける働きをしているが、homme à moustache（口ひげを生やした男）においても同じ働きをしている。homme（男）の集合の中で、どのような homme であるかを特定するため、à moustache を添えている。すなわち à N によって homme の認知的な位置付けを行っており、J'habite à Paris と同じような操作が行われているといえることができる。

そして次のような慣用句的な例もイメージスキーマ I をもとに説明することができる。まず《対応、対立》の意味を持つ tête à tête（向かい合って）、dos à dos（背中合わせに）である。tête は頭を意味し、dos は背中を意味する。二つの名詞を重ね、間に à を挟むという構造は、頭、背中がもう一方の方へ向いているということで、イメージスキーマ I で表すことができる。そして《連続、漸進》を表す pas à pas（一歩ずつ）、petit à petit（少しずつ）などは、X と Y が同一の語（pas（歩）petit（少し））で、à で結んだことにより「～ずつ」と漸進することを表す。前に進んでいることを表すため、イメージスキーマ I が元になっているといえる。

6 まとめと今後の課題

6.1 二つの点

これまでのフランス語の前置詞研究においては、à の多様な用法に関して、「～へ」という前望的、動的な意味で説明されることが多く、統一的な説明が管見の限りではなされてこなかったように思われる。本稿においては、前望的、動的という意味では説明することが難しく、一見すると共通項が見出しにくいと思われるようなものであっても、静的な点と動的な点という二つの点を導入し、統一した説明をすることができることを示した。イメージスキーマ I は移動をした後にトラジェクターがランドマークと接し、イメージスキーマ II は初めから両者が接している。いずれのイメージスキーマも一点で接するということが共通しており、à の機能について「点」でまとめられると考えられる。

6.2 まとめ

本稿では以下のことを確認した。

(I) à の場所義から二つのスキーマを描いた。一つはトラジェクターとランドマークが乖離していて、トラジェクターがランドマークの方へ移動する動的な à、もう一つがトラジェクターとランドマークは同じ位置にあり、トラジェクターがランドマークの位置にあることを示す静的な à である。

(II) 動的、静的という区分は V à N の à にも適合する。自動詞の場合、à N が必須項となるのは、ほとんどの場合で方向、終点を表す動詞か位置、存在点を表す動詞であるが、まさにイメージスキーマ I と II の元となっている。主語あるいは主語の意識、振る舞いなどが N に移動するものはイメージスキーマ I で表すことができる。類似や所属を表すものはイメージスキーマ II で表すことができる。他動詞の場合は直接目的語 (X) を à で導入される Y へ移動するタイプの動詞はイメージスキーマ I に対応する。離脱を表すとされるタイプは一見 à のイメージと合わないように思われるが、主語が行う行為が Y の方へ働きかけを行うという点で à の方向を示すという特徴と合致し、イメージスキーマ I で表すことができる。

(III) 複合名詞の場合にも二つのイメージスキーマを適用することができる。用途や適合は X が Y のためにあることからイメージスキーマ I に対応する。特徴や機能を表すもの、料理の調味料や添えられているものを表すものは X と Y に全体と部分の関係を認めることができ、イメージスキーマ II に対応する。

(IV) 本稿で描いた二つのイメージスキーマは、動的か静的かという移動の有無の違いはあるけど、いずれもトラジェクターとランドマークが一点で接している。à の機能について、「点」でまとめることができる。

6.3 今後の課題

今回は紙幅の関係により、V à N と N1 à N2 のみ扱ったが、動的な点と静的な点で à の多くの用法を説明することができる。例えば文を修飾する働きをする à N においても有効である。à mon avis (私の意見では) といった準拠の場合も、聞き手の注意を mon avis (私の意見) に向け、「私の意見」が展開するスペースへと話の流れを移動させるため、イメージスキーマ I に対応すると考えられる。

しかし一方で、点で説明することが難しいように思われる構文も残される。例えば、Je préfère le café au thé. (私は紅茶より珈琲のほうが好きだ) という比較で用いられる à、Ils vivent à quatre dans la même chambre. (彼らは同じ部屋に 4 人で暮らしている) など、人数や数値を導入する際の à である。

今後は de と対照し、à の考察を深めていきたい。de は先行研究によると所属と起源が意味である。方向と位置を表す à とは反対の意味機能を担うことも多いが、continuer

à/de や再帰構文における à と de¹⁰ のように、同じような働きをすることもある。敦賀 (2009) は両者が抽象的な前置詞であるためであると説明するが、もっと深い理由があるように思われる。Bartning (1993) の分析により、de の本質は所属と起源であるといわれているが、これらも起点という「点」に統一すれば、à と de のいずれも点を表す前置詞であるため同じような機能を果たすと考えることができるように思われる。今後は対象とする構文を広げ、特に de との交替に着目して à の機能と用法の考察を深めていく。

参考文献

- Bartning, I. (1993), « La préposition *de* et les interprétations possibles des syntagmes nominaux complexes. Essai d'approche cognitive », *Lexique11/Les prépositions : méthodes d'analyse*, Presses Universitaires du Septentrion.
- Cadiot, P. (1997), *Les prépositions abstraites en français*, A.Colin.
- Lakoff, G. (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal About the Mind*, The University of Chicago Press.
- Taylor, J. (2012), *The Mental Corpus : How Language Is Represented in the Mind*, Oxford University Press.
- Vandeloise, C. (1986), *Espace en français: Sémantique des prépositions spatiales*, Seuil.
- Vandeloise, C. (1991), *Spatial Prepositions: A Case Study from French*, University of Chicago Press.
- 梶原久梨子 (2022) 「Continuer à P と continuer de P の競合」『フランス語学研究』56、日本フランス語学会、pp.54-66。
- 梶原久梨子 (印刷中) 「心理的活動を表す再帰構文 seV1 à V2 の意味—構文文法的アプローチから」『フランス語学研究』58、日本フランス語学会。
- 敦賀陽一郎 (2009) 「現代フランス語における前置詞 à の統辞機能と用法」『東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies)』79、東京外国語大学、pp.273-307。
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか—多義論から多使用論へ』くろしお出版。

¹⁰ 梶原 (2022)、梶原 (印刷中) を参照されたい。